

国語 八十一	第三学年及び第四学年の内容 改行	名前	年	組	番
-----------	---------------------	----	---	---	---

取り組んだ日
月 日

話の内容が変わるときや、「しかし」「や」「さて」「など、文と文をつなぐ言葉を使うときは、行を変え、段落を分けて書きます。

ひとみきぬえ たいしやう
人見絹枝は、大正十四（一九二五）年 にかいどうたいそうじゆく に二階堂体操塾（今の日本女子

体育大学）を十八さいで卒業 そつぎやう したあとも、新聞記者 しや として働きながら、

陸上競 りくじやうきぎやう ぎの練習 れんしゆう にはげんでいました。そして、さまざまな競 きぎ ぎ会に出

場 ろく し、すばらしい記録 ろく を残 のこ していきました。しかし、仕事をしながらの

練習は楽なものではありませんでした。仕事の合間に、二時間ほど練習

して、また仕事にもどります。ときには、夜中の一時まで仕事に取り組

むこともあり、つかれがたまつて、練習が思うように進まないこともあ

りました。

国語 八―二	第三学年及び第四学年の内容 改行	名前	年	組	番	とく り 組 ん だ 日	月	日
-----------	---------------------	----	---	---	---	-----------------------------	---	---

場所や時間が変わったときや、「すると」「さらに」「などの、文と文をつなぐ言葉を使うときは、行を変えます。

とみたらう

① 富太郎は、家のうらにある山へ行き、草や木を観察することが大好き

かんさつ

す

でした。富太郎にとって、草木はまるで兄弟のようなものでした。草木をながめていると、とても幸せしあわで楽しい気持ちもになるのです。ある日のことです。いつものように、富太郎はうら山で草木の観察をしています。

② また、別の日のことです。富太郎は、わくわくしながら、山へ行って草木をながめていました。すると、今度は不思議なきのこに出合いました。

東京都道徳教育教材集 小学校三・四年生版 「心しなやかに」の

「植物の不思議にひかれて ―牧野 富太郎―」より

※ 一部省略

国語 八―三	第三学年及び第四学年の内容 改行	名前	年	組	番
-----------	---------------------	----	---	---	---

会話文の前後は、行を変えて書きます。また、何年かの年月が過ぎて、時が変わっている所も、行を変えて書きます。

① そして、富太郎は家に帰ると、山で見つけた不思議なきのこについて、話しました。

「あらまあ、それはキツネノヘダマですね。」お手伝いさんが言いました。

② 大人おとなになって、さらに植物のことが知りたくなった富太郎は、大学の研究室けんきゅうしつに入りました。大学で植物についての研究を続けた富太郎は、

千五百種しゆいじょう以上の植物に名前をつけました。その成果せいかは世界の植物研究家たちからもみとめられ、「日本の植物学の父」とよばれるまでになりました

た。年をとってからの富太郎は、全国の小さな子どもから大人にまで、自然のすばらしさを伝えるために、こうえん会で話したり、植物さい集の会を開いたりしました。

国語 八―四	第三学年及び第四学年の内容 改行	名前	年	組	番
-----------	---------------------	----	---	---	---

取り組んだ日
月 日

きょうぎ せつめい
競技の説明から競技のようすへ、競技のようすから絹枝のようすへ、
ないよう
と話の内容が変わっている所では、行を変えます。

よく日、いよいよ女子八百メートル走の決勝です。この競ぎは九人の
選手が四百メートルのトラックを二周走って競います。絹枝はスタート
から必死に走りました。しかし、一周目が終わるころには六位にまで落
ちてしまいました。これではいけないと、苦しいながらもスピードを出
し、あと二百メートルというところで、二位と三位の選手に追いつきま
した。絹枝は、自分がいつゴールに入ったのかわかりませんでした。体
力を使い切って、自分の力で立ち上がることもできません。

国語 八―五	第三学年及び第四学年の内容 改行	名前	年	組	番
-----------	---------------------	----	---	---	---

取り組んだ日 月 日

話の内容や場面、日時が変わっている所では、行を変え、段落を分けて書きます。

ひでお 英夫の家の近所には、小さな町工場が並んでいました。英夫は、しょく人さんの作業を見るのが好きで、学校から帰るとよく町工場に行きました。また、英夫はベーゴマ遊びが大好きでした。負けてしまうと相手にベーゴマを取られてしまうので、なんとしても強いベーゴマを作ろうとひっし 必死でした。ある日、英夫は、ベーゴマを強くするために、しょく人から材料を分けてもらい、重くしようと手を加えました。